

# 多摩支部会報 第49号

明治大学校友会  
東京都多摩支部  
支部長 當麻 功  
広報委 飯田光宏

野球部通算41回目の優勝  
欧州の杉原か 沖縄の島田・荒井か 2022年7吉日発行



6月29日は普段通り、中央線を中野で降りて勤め先のある池袋まで歩いている途中に会社の後輩からメールが入りました。メールは明大スポーツを送ったことへのお礼と春季リーグ戦優勝パレードと祝勝会が行われるとの内容でした。

早速、明大のホームページを見ると、何と今日、6月29日（木）17時20分にリバティタワー前をスタートとあるではありませんか。午後半休を申請して、午後に行ったん帰宅して、カメラの準備をして16時過ぎにはリバティタワー前に到着。ホームページの告知が急だったこともあって、到着した時点では人はまばらでしたが、徐々に人も集まり始めたので、前回の優勝パレードを思い出して先頭に陣取り、パレードが始まったら何枚かカシャ、カシャと数枚撮

り早々にアカデミーコモンに移動、祝勝会是一般席の最前列に着席することができました。

祝勝会では、大六野学長のあいさつに始まり、田中監督、村松主将の春季リーグの応援への感謝の言葉と振り返り、秋のリーグ戦への決意表明がありました。その後、応援歌のメドレーがあり、最後は応援団の校歌で約1時間の祝勝会を締めくくりました。

（応援団は写真NGで、校歌も歌えなかったのでもちょっと残念でしたが、参加者は手拍子を打ち、心の中で歌っていたと思います。

（提供 越智浩治氏 s59 商 国立）

映画「島守の塔」は5頁以降に





この日明大ナインは優勝パレードを行い、神保町と御茶ノ水の街を練り歩いた。出発地点のリバティータワー前に集まったファンたちの声援を受けながら、行進はスタート。沿道の地元の人たちの祝福の声に大きく手を振りながら進んでいった。後方からの応援団による演奏が響く中、数々の「おめでとう」にナインはとびきりの笑顔で応えていた。

優勝パレードを終えた選手一行はアカデミーコモンにて開催された祝勝会へ。大勢の明大関係者及びファンが春季リーグ戦での優勝を盛大に祝った。大六野耕作学長のユーモアを交えた挨拶に始まり、村松開人主将（情コミ4＝静岡）は関係者への感謝

と共に、部員全員へのねぎらいを口にする。田中武宏監督による愛のこもった選手紹介も行われ、会場は笑顔に包まれた。また、監督、選手への質問コーナーも行われ、選手の意外な一面も垣間見られた。

続いて行われた応援団によるスペシャルステージは、『紫紺の歌』で幕を開けた。チャンステーマメドレーでは、優勝した際だけに演奏される『神宮勝歌』も披露され、会場を大いに盛り上げた。最後を飾ったのはもちろん『明治大学校歌』。秋季リーグ戦へ向け、応援団による明治大学野球部への精一杯のエールが送られた。

記事：明大スポーツ 栗村咲良、西田舞衣子 転載



写真：越智氏  
(S59 商 国立)



会期：2022年6月14日（火）  
 ～8月9日（火）  
 会場：明治大学博物館  
 大学史展示室  
 開館時間：月曜～金曜  
 10:00～17:00  
 土曜日 10:00～12:30  
 休館日：日曜・祝日  
 資料提供：越智浩治氏



明大、延長 11 回  
 劇的サヨナラ勝ち！！



応援団の力強いエール

サヨナラ犠牲フライを放った葦尾選手





# 明大応援指導班初の女性班長・中山実優さん 「応援したい気持ちに性差はない」 伝統継承とジェンダー 平等両立に挑む

東京新聞WEB 2022/06/22



学ランをまとい、勇ましい声や手ぶりを駆使して観衆を鼓舞する。吹奏楽、チアリーディングとともに明大応援団を組織する応援指導班。そのトップに女性で初めて中山実優(みう)さん(21)＝4年＝が就任した。1921年創団の歴史を誇る応援団。「応援したい気持ちに変わりはない。そこに性差はない」との思いを抱く。(対比地貴浩)

明大応援団「吹奏楽部」「バトン・チアリーディング部」「応援指導班」で構成され、これらを取りまとめる応援団長も女性が務めている。「応援指導班」は大きな声と全身を使って観客を引きつけ、応援をリードするのが役割。「女性禁止ではなかった」ため、体験練習に参加。そこで衝撃を受けた。所作一つとっても常に全力。声を張り上げ、手指の先まで神経を使う。張り詰めた緊張感の中、班員のきびきびした動きや迫力ある声に「触れたことのない文化。こんな真面目で、真っすぐな団体があるんだと思った」。高校時代には経験のなかった世界に魅了され、入団を決めた。応援指導班で初の女性だった。懸念もある。女性班員に配慮するあまり、入団時に引き込まれた武骨な雰囲気失われつつあり、寂しさを感じている。「男女誰でも班員になってほしいが、時代を理由に何でも変えていいわけではない。文化を守りたい」。女性に門戸を開きつつ、先輩たちが築いてきた伝統をどう継承するか。組織の長になったからこそ、葛藤しながら挑んでいる。



明治大応援団応援指導班の班長を務める中山実優さん

出典：6月22日 東京新聞web



明治大学OB

命を懸けた二人の島守と沖縄の人々の物語

20万人が犠牲となった

日本国内唯一の地上戦「沖縄戦」

命を懸けて「命(ぬち)どう宝、生きぬけ!」と叫び続けた二人の官僚

その命の重みを受け継ぎ「沖縄戦」を生き抜いた沖縄県民

それぞれの苦悩と生きることの奮闘を描く

劇場用映画

# 島守の塔

監督 五十嵐匠 脚本 五十嵐匠・柏田道夫

出演 萩原聖人 村上淳 吉岡里帆 香川京子 ほか

製作 映画「島守の塔」製作委員会

下野新聞社／神戸新聞社／琉球新報社／沖縄タイムス社／クイック／スチームピクチャーズ  
サンテレビジョン／毎日新聞社／とちぎテレビ／井上総合印刷／ウイージの森／トロッコフィルム

荒井退造 沖縄県警察部長  
巡査をしながら明治大学夜間部を卒業  
1927年高等試験に合格、同年内務省  
に入省した苦学力行の人物、栃木県出身  
ウイキペディア

2022年7月22日から  
[シネスイッチ銀座] (中央区銀座) にて公開



# 「沖繩戦」

第二次世界大戦末期の1945年(昭和20年)沖繩本島及びその周辺離島に上陸したアメリカ軍とイギリス軍を主体とする連合国軍と日本軍の間で行われた激戦。1月1日、沖繩本島中部に上陸したアメリカ軍は、島を南北に分断。迎撃のため、日本軍は南部撤退による持久戦を展開。その結果、沖繩県民を巻き込む激しい地上戦となる。6月23日、日本軍司令官・参謀長らの自決により組織的戦闘は終結。この戦争での沖繩県民の死者は12万2278人、そのうちの9万4000人は、一般の住民であった。

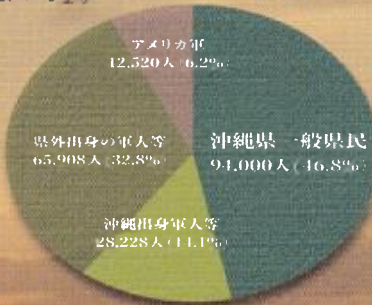
## 米軍上陸全般図

※戦史叢書 沖繩方面陸軍作戦1から



## 沖繩戦の死者

※沖縄県ホームページより



県民の命を守るこそこそが  
白らの使命である。

# 沖繩戦に関する年表及び島田勲・荒井退造の事跡

沖繩の戦い、島田勲と荒井退造の事跡

1941年(昭和十六年)  
12月 ハワイ珍珠湾攻撃、太平洋戦争開戦。

1942年(昭和十七年)  
6月 ミッドウェー海戦

8月 ガダルカナル島の戦い

1943年(昭和十八年)  
5月 アッツ島占領

7月 荒井退造警務部長、福井県首長から沖繩県に着任。

1944年(昭和十九年)  
7月7日 緊急開戦で南西諸島の老幼婦女子・学童の4万7千8百人、台湾2万人への疎開決定。呉攻め、いよいよ「戦場行啓」に入る。

8月22日 学童疎開船「対馬丸」、鹿児島県壱志石島沖で撃沈。

10月10日 「十・十空襲」米機動部隊、早朝から五波にわたり南西諸島空襲。那覇市の約90%が灰になり、一万、〇〇〇名が罹災、一、四三六人が死傷。

11月11日 大蔵府内務部長・島田勲、沖繩縣知事への内務省内示を即断却決で敢然と拒命。

中甸 島田、友人に「断れば早稲者、沖繩も日本の一県である。おれは死じとうないから、誰か行って死ねとほよう言わん」と、その心境を漏らす。

1月31日 島田知事、トランク一つを背負って単身赴任。執務開始。

2月7日 戦、戦場行啓への人機機動部隊、疎開と食料確保に専念。

2月27日 島田知事、米軍の制海、制空圏の危険を顧みず、自ら台湾水移入交渉のため、急ぎ台湾總督府へ飛ぶ。

3月中旬 島田知事が交渉した台湾米、〇〇〇石、那覇港に到着。大部を陸揚げ後、名護港に回航。

3月26日 米軍、慶良間列島に上陸。住民約七〇〇人が強制疎開。

4月1日 米軍、本島中部西海岸を占領。北谷間に上陸。北・中飛行場を占領。

4月27日 敵前緊急市町村長、警察長合同会議を県庁、警務部で開催。南下する避難民の受け入れを協議する一方、後方指導挺身隊や十八市町村への分遣隊を編成。

5月中旬 島田知事、軍の自里放棄案に「県民が大きくなる」と反対。牛島司令官に申し入れ。

5月22日 第三軍指分隊、首里を放棄し、南部撤退を決定。



撃沈された疎開船「対馬丸」(那覇市歴史博物館蔵)



十・十空襲で大きな被害を受けた通商・東町一帯(那覇市歴史博物館蔵)

## 第53回全国校友沖繩大会前日「荒井退造氏慰霊式」開催

2017年11月17日、「元沖繩県警察部長荒井退造氏慰霊祭」が糸満市摩文仁の沖繩県営平和祈念公園内で行われました。

慰霊祭は、この史実を校友会活動の中で知った東京都多摩支部の鈴木紘一さんや栃木県の長谷川薫支部長などの提案、尽力で「沖繩大会を機に」と実現したもので、沖繩、栃木そして兵庫3支部の共催で、降雨にもかかわらず100人以上の参列者を得て行われました。

宮里支部長の開会の辞のあと、東風平朝秀さんが指揮して校歌斉唱し、黙祷を捧げ、名幸俊海護国寺住職の読経いただきました。翁長雄志知事(代理)挨拶後、長谷川支部長が熱くも切々と追悼の辞を述べられた。さらに、向殿政男会長、土屋恵一郎学長にもご挨拶いただき、参列者一同が焼香して、偉大なる先輩校友の霊を弔い、あらためて遺徳を偲びました。





第二十七代沖縄県知事

写真提供 = 財団法人島守の会

# 島田

しまだ・あきら／1901年兵庫県神戸市生まれ。旧制神戸二中（現・兵庫県立兵庫高等学校）、第三高等学校を経て、1922年に東京帝国大学法学部へ入学。東大卒業後、1925年に内務省に入省。主に警察畑を歩み、1945年1月、沖縄への米軍上陸が必至とみられている状況の中、辞令を受け、県知事として着任する。沖縄戦の混乱により県庁が解散するまでの約5ヶ月間、疎開の促進と食糧確保等、沖縄県民の生命保護に尽力。戦争が激化し、摩文仁の丘に追い詰められた際、県庁組織の解散を命じ、ともに死ぬという部下に「命どう宝、生きぬけ」と伝え、逃した。最期は荒井警察部長とともに壕に留まり、後に摩文仁の森にて消息を断つ。今日まで、その遺体は発見されていない。享年43歳。



写真 = 栃木県立博物館蔵

あらい・たいぞう／1900年栃木県宇都宮市生まれ。栃木県立宇都宮中学校（現：宇都宮高校）、高千穂高等商業学校（現：高千穂大学）に進学、後に明治大学夜間部を卒業、同年内務省に入省。1943年沖縄県警察部長に就任。沖縄が戦場となる危機が迫るなか、戦況を楽観視していたため疎開政策に消極的だった当時の知事に代わり、県民の疎開・保護に尽力した。島田勲が沖縄県知事着任後は一人三脚で奔走し、1945年3月までに県民7万3000人の県外疎開に成功。米軍上陸により県外疎開が不可能となった状況でも島田知事とともに合わせて延べ20万人の命を救ったとされる。最期は島田知事と摩文仁の森へ向かった後、消息を断つ。今日まで、その遺体は発見されていない。享年44歳。

# 退荒井

沖縄県警察部長

一九五一年「昭和二十六年」  
6月25日 島田知事、荒井警察部長をはじめ、県民の安全確保に挺身した戦没県職員四六九柱を「島守の塔」に合祀。

6月16日 島田知事、轟の壕から摩文仁の軍指令部壕へ、その後、軍医部隊へ入る。秘書官、警護官と別れる。  
6月23日 牛島司令官と長参謀長、軍指令部壕で自決。沖縄戦の組織的戦闘止む。  
6月26日 島田知事、荒井警察部長、軍医部隊が出る。以後、公式の消息は不明。  
島田知事の覚悟  
「君、一県の大長官として、僕が生きて帰れると思うかね。沖縄の人がどれだけ死んでいるか…。僕くらい県民の力になれなかった県知事は、後にも先にも先にもないだろうなあ…。幾多県民を死なせた地方長官もまた、その責めを負わねばならない。」と明言。  
（※毎日新聞・野村支局長との6月19日のやりとりから）

6月7日 島田知事、轟の壕にて県庁と警察警備隊を解散。六十八年に亘る県と警察部の歴史に幕。  
ここに沖縄県消滅。随行した県・警察部職員に、  
「今後は自重自愛するように」「生きる」というメッセージを伝達。  
6月16日 島田知事、轟の壕から摩文仁の軍指令部壕へ、その後、軍医部隊へ入る。秘書官、警護官と別れる。  
6月23日 牛島司令官と長参謀長、軍指令部壕で自決。沖縄戦の組織的戦闘止む。  
6月26日 島田知事、荒井警察部長、軍医部隊が出る。以後、公式の消息は不明。  
島田知事の覚悟  
「君、一県の大長官として、僕が生きて帰れると思うかね。沖縄の人がどれだけ死んでいるか…。僕くらい県民の力になれなかった県知事は、後にも先にも先にもないだろうなあ…。幾多県民を死なせた地方長官もまた、その責めを負わねばならない。」と明言。  
（※毎日新聞・野村支局長との6月19日のやりとりから）

空 沖縄根拠地隊司令部 別 海軍次官  
沖縄県民ノ実情ニ関シテハ君知事ヨリ報告セラルヘキモ  
ニハ以テ通信力ナク、三、軍内各部又通信ノ余力ナシト認メラルルニ付  
本報員知事ノ依頼ヲ受ケテレニヨリサレドモ、現状ヲ看過スルニ忍ビズ  
之ニ代リテ是レヲ通知申上ル  
只若日本人トシテノ御本公ノ通ヲ胸ニ抱キツツ  
逐ニ「ウヘ」コ、ナクシテ  
本報員ノ未期トシテ御入ニ支持セリ「一本」ニ付「ト化セン  
轉食六日」并ニ「ウヘ」コ、ナクシテ  
沖縄県民ノ「ウヘ」コ、ナクシテ  
注）……部分は判読できず、意味不詳だが、原文のままとしました。

5月25日 荒井警察部長、内務省に「六〇万県民只暗黒ナル壕内ニテ生ク」と現状報告の打電。  
6月5日 島田知事以下県庁・警察部職員、雨中泥まみれの中、南部へ撤退。  
6月6日 海軍、沖根の大田司令官、島田と荒井の意を体し、不朽の電文「沖縄県民斯克戦ヘリ」を打電。







## 戦争の中継ぎ世代として

映画「島守の塔」製作委員会委員長／嘉数昇明（元沖縄県副知事／島田叙氏事跡顕彰期成会会長）

沖縄戦を体験した方々も残り少なくなってきた。私は昭和17年生まれで、2歳のときに大分へ疎開した。海を渡るわけで、いつ潜水艦に攻撃されるか分からない状態。行くも地獄、残るも地獄だった。島田さんや荒井さんは、こうした地へ本土から来られた。軍からの指令や要求を受け、学徒の名簿を軍に提出した際、島田さんは煩悶したのではないか。県政の責任者として「鉄の暴風」と形容される沖縄戦の真っ只中で、県民の命を救うため懸命に努力された島田さん、荒井さん、県庁職員の姿から、今に通じる公職にある人の生きざまを問うているのではないか。

沖縄、兵庫、栃木の地元メディアを中心にスクラム組んだ映画製作の意義は大きく、地域に根差した目線であるからこそ、説得力も生まれると思う。ぜひ、たくさんの方にご覧いただきたい。戦争を知っている世代と知らない世代の中継ぎ世代として、そう強く思います。



## 地上戦があった沖縄を舞台に、それぞれの生きる姿を描く

映画「島守の塔」監督／五十嵐 匠

日本が総力戦へと突っ込んでいった沖縄戦末期、本土より派遣された2人の内務官僚がいた。兵庫県出身の知事・島田叙氏と栃木県出身の警察部長・荒井退造氏である。

学生野球の名プレーヤーとしてならした島田氏は、戦中最後の沖縄県知事として沖縄に赴任する。度重なる軍の命令に応えるべく内務官僚としての職務を全うしようとする。しかし、戦禍が激しくなるにつれ、自分が県政のトップとして軍の論理を優先し、住民保護とは相反する戦意高揚へと向かわせていることに苦悩する。そして多くの住民の犠牲を目の当たりにした島田氏は「県民の命を守ることこそが自らの使命である」と決意する。警察部長の荒井氏もまた島田氏と行動を共にし、職務を超え県民の命を守ろうと努力する。実は、沖縄戦で2人は、それぞれ重い十字架を背負っていた。島田知事が着任する前、荒井氏は沖縄を離れていた前知事の代わりに県民の疎開を必死に推し進めていた。その矢先、本土に向かって学童疎開船「対馬丸」を米軍の攻撃に遭わせてしまったのだ。そのため、数多くの子供達が犠牲となった。その船には自分が疎開をすすめた部下の家族も乗りあわせていたのである。島田氏は県政の責任者として軍の命令を受けて鉄血勤皇隊やひめゆり学徒隊として多くの青少年を戦場へと向かわせていた。2人はそんな十字架を背負いながらも、戦争末期、戦禍が激しくなる中、必死に県民の疎開に尽力し多くの沖縄県民を救っていった。

一億総玉砕が叫ばれる中、敗走しながらも、島田氏は叫んだ。「命どう宝、生き抜け！」と。

映画「島守の塔」は、第二次世界大戦の末期、長期にわたる日本国内唯一の地上戦があった沖縄を舞台に、軍の圧力に屈しながらも苦悩し県民の命を守り抜こうとした島田氏と荒井氏、そして沖縄戦で戦火に翻弄されながらも必死に生きる沖縄県民、それぞれの生きる姿を描く映画とする。

# 次世代に語り継ぐ「島守」

編集後書 多摩支部会報第48号を発行したばかりでしたが、今般、明大OBが戦中、沖縄県民を戦禍から避難させた史実が映画化され、公開されることになりましたので、多くの校友にご覧願いたく、急遽、野球部の第41回目の優勝を果たした優勝ハレードと併せた構成で第49号として発行致しました。web発行です。

2022年7月吉日

多摩支部広報委員会

飯田光宏